

読書会による共感力・コミュニケーション能力向上の試み

An Attempt to Improve Empathy and Communication Skills through Book Clubs

村 松 純 光

はじめに

本稿は本学2024年度共同研究「読書会による共感力およびコミュニケーション能力向上」の成果について報告するものである。

本研究は2023年度末に開催された「静岡英和ブックカフェ」の試み（※1）を単発のイベントに終わらせず、学部学科の枠を越えた読書会として学内に定着させたいという主催者・重森雅嘉（現代コミュニケーション学科）の考えに賛同する大槻知世（人間社会学科）、村松純光（現代コミュニケーション学科）の三者により執行された。前年度来の「静岡英和ブックカフェ」の名称はそのままに、年度内に複数回の実施を計画しながら諸般の事情から1回きりの実施に終わってしまったが、その後幸いにも研究の継続が叶い、2025年度の現在も「静岡英和ブックカフェ」の試みは進行中である（年度内に2回の開催を予定）。本稿は2024年度共同研究の成果報告であるから、2025年度分については場を改めることとするが、データの蓄積が進み研究の精度が高まれば、より密度の濃い読書会の開催が可能となるだろう。

以上の経緯から今回の成果報告は、今後も長く続いていくであろう本研究の序にあたるものと位置づけ、そもそも読書会とは何かという話題から、学校や社会における読書会のあり方の変化、2024年度に開催した「第2回 静岡英和ブックカフェ」の実践報告等で構成することをここで断っておきたい。

第1章 研究の目的

本共同研究の代表者大槻は、先に提出済の「共同研究成果報告書」の中で本研究の主目的を「読書会に参加した大学生・短大生が共通の書籍（ノンフィクション、エッセイ、フィクション、等）を読み、その内容について話し合うことにより、他者視点の獲得、他者への共感における変化を測定することにある。」とした。

先述したとおり読書会「静岡英和ブックカフェ」そのものは本研究を開始する前年の2023年度末に重森の発案によって既に始まっており、会の前後に参加者から同意を得てアンケートを実施し、事前と事後における共感力の変化を測定・分析するという研究方法の雛形も初回に倣ったものである。

なお「測定」にあたっては、共同研究者3名それぞれの専門領域からの知見を活用することを申し合わせた。これは参加者の数によっては重森がおこなう多次元共感性尺度（MES）を用いた定量的な比較や統計的分析が難しいためである。成果報告も読書会の幹事となった者の裁量に任せることとした。本稿を代表者の大槻ではなく村松が執筆しているのも「第2回 静岡英和ブックカフェ」の幹事を村松が務めたことによっている。そのため本稿では村松（以降筆者とする）が専門とする教育方法学・国語科教育学における記録作法に倣い、「授業実践報告」に近い体裁をとったことをあらかじめ断っておきたい。

第2章 「読書会」とは何か

本研究で言う「読書会」がどのようにおこなわれたかについて説明するために、まずは我々が日頃「読書会」と呼んでいるものの一般的な形態や、その文化的な位置付けについて簡単に確認しておきたい。

(1) 読書会の形態 ～「典型的な読書会」とは～

一般に言う「読書会」とはどのようなものであるか。『読書会の教室』（※2）によれば、その形態は大きく以下の5要素から成っている（同書p33の内容を筆者が再構成）。

- ・選書方法（主催者の選定した課題本にて・参加者個々が持ち込んだ本にて、等）
- ・場所（実会場で対面にて・オンラインにて・SNS上での文章のやりとりを通じて、等）
- ・回数（1回きり・複数回）
- ・参加者（対象者を限定する・しない）
- ・ゲストの有無（著者や講師などのゲストを招く・招かない）

これら5要素の組み合わせで幾通りもの読書会が可能ということになるが、実情はどうであろう。『読書がさらに楽しくなるブッククラブ』（※3）には、全国の図書館や公民館でおこなわれている「典型的な読書会」の形態として以下の4条件が紹介されている（同書p62～63より抜粋）。

- ・「月1冊のペースで読む。」
- ・「読む本はメンバーが順番に決める。（一部略）」
- ・「当日の司会進行も、本を選んだ者が行う。」
- ・「メンバーは事前に本を読んで会に出席する。話し合う時間は約2時間とする。」

ここに並んだ条件を眺めると、一般的な読書会とは概ねこうした“無理のない”形態を選択するものであることが分かる。

詳細は後述するが「静岡英和ブックカフェ」の形態も、開催のペースを除いてはこの「典型的な読書会」の型を踏襲したものとなった。広く学校や公共施設で活用されてきたこの“無理のない”フォーマットには、なるほど相応の合理性があるようだ。

(2) 読書会の実際 ～高等学校を例に～

たとえば高等学校における読書会は、生徒会内組織のひとつである図書委員会が主催しておこなわれるケースが多い。「月1冊のペース」という程の活発さはなかったが、形態は前項に挙げた「典型的な読書会」に近いものであったように思う。これは筆者が複数の高等学校で長く生徒会の顧問を務めた経験から当時を思い出して書くことだが、図書委員会主催の読書会の参加者は大抵が図書委員の生徒である。一般生徒から参加者を募ったところで、会の実施が放課後となると部活動顧問が参加を認めないケースがたびたびで、結局は内輪（委員会内）で実施するしかないのが実情であった。

万年生徒指導課に籍を置きながら司書教諭資格保有者でもあった筆者（実際に発令されていた時期もある）は、図書館活動の活性化のため生徒会執行部の生徒を伴って会に参加することが何度かあったが、図書委員が人数合わせのため渋々参加していた印象のこの会にあまりいい思い出はない。様々なタイプの生徒が集まり、まとまらない議論を楽しむのが読書会の醍醐味と考えていた筆者には、率直に言って退屈に感じることの多い行事であった。無論これは勤務校における「図書委員会活動としての読書会」に対する私見であり、実態は学校・指導者によって様々であろう。国語科の正課授業内でおこなわれた実践の中には示唆的な事例もあるし、近年話題となっている「高校生直木賞」の試み（※4）のように、出版業界に影響を与えるまでに成長した大規模読書会も存在することを断っておきたい。

(3) 読書会の変容 ～学生文化から社会人文化へ～

今この時代における読書会の主たる受容者とは、いったい誰であろうか。たとえば齋藤孝はかつて『読書力』（※5）の最終章にこう書いていた。

「(略) 読書会は、かつて一つの文化であった。大学生になれば、本を読んできて集まり、それについて話をすることは、誰に強制されるともなく続いてきた文化であった。時代によっては、マルクス主義の文献を読む会といった勉強会的な色彩の濃い読書会もあった。それほど本格的なものでなくとも、二人で本を決めておいて別々に読んできて話をするというのも、私はよくやっていた。(略) 現在の大学生の間では、読書会はすでに死語化しつつある。同じ本を読んできたうえで集まって話をする、という行動様式を一度もしたことがないという学生がほとんどだ。ゼミという授業形態であればやったことがあっても、自分たちで自主的に楽しみとして行うという文化的土壌は、かつてに比べて格段に痩せ細っている。」(同書p172～173より)

既に四半世紀近く前の記述だが、大学生の実態に関しては現状も大きく変わることはないだろう、というのが一教員たる筆者の実感である。ただ近年は読書会をこれとは違う角度から扱った記事を目にすることが多くなったように思われる。たとえば先述の「高校生直木賞」の発案者でもある伊藤氏貴は2011年発行の著作（※6）の中でこう書いている。

「読むときに他人に説明することを想定するばかりでなく、実際に人に対して語る手段として、

最近「読書会」というものの輪が広がりつつあるようです。昔から「輪読」や「講読」という方法はあったのですが、大学のような場所の中に限られていたり、ある特定の権威ある人が中心になって、その人の講義を聞くだけだったり、あるいはもともと気の合う友だち同士が集まって、というかたちのものがほとんどでしたが、最近の読書会は、まったく知らない者同士が気軽に参加できるようになっています。」(同書p122より)

この記述が為された頃は、社会人の「朝活」や「異業種交流会」などがにわかに話題になっていた時期と重なるように思うが、さらにここ数年、『読書会入門』(※7)『読書会という幸福』(※8)といった新書本が版を重ねる現象から、かつて学生文化であった「読書会」が、今や完全に社会人文化に組み入れられた感がある。

社会人が読書という“体験”ひいてはその“経験”化に飢えていることは、2024年度に最も売れた新書本が『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』(※9)であったことに暗示されている。読書欲が一向に満たされない状況のもと、ただ日々を鬱々と働くしかなかった社会人の関心が、「読書会」という“働いていてもなんだか本が読めそうな場”に向かうのは、まこと理にかなった現象だと思うのである。

第3章 「第2回 静岡英和ブックカフェ」開催報告

これより、小説『こちらあみ子』(※10)をテーマブック(本読書会では課題図書をこう呼ぶ)として実施した「第2回 静岡英和ブックカフェ」について詳述していきたい。

(1) 読書会のコンセプト ～「異年齢コミュニケーション」の場～

「テーマブックを読んで、お茶やお菓子をつまみながらみんなで内容について気軽に話しましょう。本を読むのが好きな人も、何か新しいことに挑戦してみたい人も気軽に参加してください。学生、教職員だれでも歓迎！」(「静岡英和ブックカフェ」参加者募集チラシより)というのが、重森の手になる本読書会のコンセプトである。静岡英和学院大学の関係者であれば年齢や学年、学生・教員の別を問わず誰でも参加できるという本会は、いわゆる「異年齢コミュニケーション」の場と云っていいものだろう。

既に十数年ほど前のことになるが、当時静岡県人づくり学術班の職員であった筆者は、「リーディングカフェで待ち合わせ」なるイベント取材し、県発行の広報誌に紹介記事を書いたことがあった。(※11)これは全国的にも稀な県有の劇団であるSPAC(静岡県舞台芸術センター)が県民サービスとしておこなっていた出張企画「リーディングカフェ」(喫茶やおしゃべりを楽しみながらおこなう戯曲の朗読・輪読会)を静岡大学の教室を会場に実施したもので、同大の学生有志が運営に関わっているのが大きな特色であった。この日参加者が順に朗読していったテキストの選書も学生自身が時間をかけておこなったとのことで、筆者の取材にも当時大学4年生であった女子学生が丁寧に応じてくれ、その行動力と機転に感心させられたのを覚えている。参加者の内訳は県内の大学

生が10名に社会人が4名の計14名であった。これに進行役としてSPACの俳優さんが加わり、筆者も取材する側の身ながら時におしゃべりの輪の住人にもさせられ、和やかな空気の中あつという間に時間が過ぎていった。学生と社会人の別のないこうした試みもまた、「異年齢コミュニケーション」の場としての「読書会」の一例と考えていいだろう。

今回の「第2回 静岡英和ブックカフェ」もSPAC「リーディングカフェ」のように、随所に朗読を織り込んだ展開にしてみたらどうだろうか。筆者の中で会のイメージが膨らんでいった。

(2) 開催までの流れ

以下は「第2回 静岡英和ブックカフェ」の開催決定から当日までの流れを時系列で整理したものである。末尾に共同研究者3名の業務分担も付記した。本読書会ではこの流れがほぼルーティーンとして機能している。

1. 幹事（主宰）の決定

合同研究者3名の中から次回ブックカフェの幹事を決定する。幹事は読書会で使用するテーマブックの選定や開催日時・会場等の調整をおこなう他、当日のファシリテーター役も担う。今回は筆者がこの任に当たった。

2. 開催告知と参加者の募集

学内ポータルシステム等を通じて学生・教員に開催の告知をおこない、SNS上に用意した申し込みフォームを通じて参加者を募る。今回は大槻と筆者がこの任に当たった。

3. テーマブックの配布

参加者数が確定したところでテーマブックを人数分（学生分のみ）購入し、参加者に配布する。今回は図書館の協力も得て大槻がこの任に当たった。

4. 会場準備

当日使用する飲み物や菓子類を購入し、「カフェ」の体裁を整える。今回は共同研究者3名全員がこの任に当たった。

(3) テーマブックについて

今回のテーマブック『こちらあみ子』の表題作は、もともと「あたらしい娘」の題で発表され太宰治賞を受賞した作品を2011年の単行本化に合わせて改題したものである。さる限界で静かな話題となっていることは知っていたが、筆者の初読は文庫化された2014年で、なぜもっと早くに読まなかったのかと悔やまれてならなかった。一歳でも若い時に会っておくべき作品と思われたのである（ずっと以前に文庫で『檜山節考』（※12）を読んだ時にも同じようなことを思った）。その後2022年に映画化（※13）されるとさらに多くの読者を獲得し、世に出てからまだ15年ほどでありながら、すでに古典のたたずまいを感じさせる稀有な作品である。ここではあらずじにふれることはしないが、特に教育や福祉に携わる者には必読の書と言っていいだろう。教職課程を置いており、福祉やコミュニケーションに関わる学科を擁する本学の学生にもぜひ薦めたい、それが選書の一番

の理由である。

多分に教育的な理由から選書をおこなうのは「静岡英和ブックカフェ」のコンセプト的には好ましくないようにも思ったが、こう読んでほしい、こう解釈してほしいといった押しつけがましい態度さえ廃すれば問題はないであろう。いや、それが仮に出てしまっても、さらりと無力化してくれるようなポップな発言を参加者（特に学生の）には期待したい。それこそが「異年齢コミュニケーション」の醍醐味であるだろう。

(4) 開催記録Ⅰ ～ ファシリテーターの仕事を軸に ～

「第2回 静岡英和ブックカフェ」は2025年3月19日(水) 13時より2時間、静岡英和学院大学図書館セミナー室にて開催された。参加者は募集に応じた学生3名と共同研究者3名の計6名であった。学生3名の内訳（所属）は、Aさん（現代コミュニケーション学科2年）、Bさん（現代コミュニケーション学科1年）、Cさん（コミュニティ福祉学科1年）で、いずれも女子学生である。

ファシリテーター役の筆者は「お茶やお菓子をつまみながらみんなで内容について気軽に話しましょう。」という会のコンセプトに従って、敢えて次第もレジュメも準備しないで臨んだ。どこが始まりでも、何が終わりでもないような、議論になればなったに任し、囁き合いが延々と続いたならばそれに任し、というような場になっていればそれでいいわけだから、ファシリテーターも「気軽」でいいはずである。しかしながら、そういう場にこそ教員は不慣れなもので、元国語科教員の「読解癖」のようなものが頭をもたげ始めたり、話の落としどころを探り始めたりするのを自ら制するのに懸命であった。

参加者による自己紹介（所属学科、学年、参加の動機等）の後、まずは作品の全編を読んできたかを聞き合ってみたところ、学生3名のうち1名が未読であった。ただ、この1名もたまたま作品の映画版は視聴しており、会への参加に大きな支障はなかった。読書会には付き物の「読んでこない人問題」であるが、今回のように別媒体を通じて内容は知っているという参加者の存在は、原作との比較で話が盛り上がるなど案外ありがたかったりするものである。そういえば齋藤孝も前述の『読書力』の中でこう書いていた。

「一番大事なことは、全員が最後まで読んできているということを前提としないということだ。読書会がうまくいかなくなる最大の原因は、読書会当日までに本を読み終えることができない人が多数出てしまうことだ。そのために出席しない人、出席しても話ができずに疎外感を味わう人などが出てくる。そうして立ち消えになっていく読書会は多い。私が主催した読書会でも、読んで来られない人が多くいたので、読み終えていない人でも楽しむことができる読書会運営を行った。」（同書p173～174より）

「読んでこない」など論外だ、と片づけるのではなく、そういう参加者にも役割を与えて違う角度から発言を求めたり、その人が最後には読んだ気になってしまうくらいの会を目指そう、というコンセプトに切り替えるなど、考えようで幾らも存在意義は出てくるものである。

齋藤孝が言う「読み終えていない人でも楽しむことができる読書会運営」については筆者も考え

るところがあり、本章の(1)にも書いたが、朗読のアクションが入った「リーディングカフェ」型の読書会もそれに当たるように思う。今回の読書会では専ら私の役目となったが、作中のいくつかの場面を実際に朗読してみた。そうすることで、少なくともその場面に関しては参加者全員が「既読」となるからである。

『こちらあみ子』は会話文に力がある作品で、台詞に面白みや悲しみが凝縮されている。今回の読書会では、たとえばあみ子の母の次の台詞を朗読してみた。

「いけません。ちゃんと宿題して毎日学校にも行ってお友達とも仲良くして先生の言うことをしっかり聞いてお行儀よくできるならいいですよ。できますか？ 授業中に歌をうたったり机にらくがきしたりしませんか？ ボクシングもはだしのゲンもインド人ももうしないって約束できますか？ できるんですか？ できますか？」(同書p20より)

この畳みかけるような大人特有の物の言い方に、私たちが共有する「懐かしさ」みたいなものを感じはしないだろうか、そう思って朗読箇所を選んだのであった。子ども時代にこういうこと言われた？ こういうこと言われてばかりの子っていた？ という話題に繋がったわけである。参加者も思い当たるところがあるのでは、と考えてのことである。参加学生からは、カッターを振り回す同級生がいた、ベランダから飛び降りようとした子を先生が抱えて阻止していたのを覚えている、などの、子ども時代の生々しい体験が語られた。

また、あみ子の兄が不良になるきっかけになったかもしれない「お墓事件」のくだり(同書p58周辺)を朗読し、参加者に、こんな風によかれと思ってやったことが周囲に理解されなかったり、誤解されたりした経験ってある？ と尋ねてみたりもした。朗読の後にする質問には総じて参加者の食いつきがよく、誰かの発言が呼び水となってまた別の誰かの発言が続く展開が生まれた。

ファシリテーター役の筆者が参加者に向けておこなった質問をほかにも挙げておくと、「あみ子みたいにチョコクッキーをちょっと湿ったプレーンクッキーにした経験はある？」という他愛のないものには、教員のひとりから「ポッキーならある」という発言があり、座が和んだ。あみ子が前歯を3本失った事件にふれた後の「一番大切な人に裏切られたり、ひどい仕打ちをされたりした経験はある？」というやや重たいものには、学生のひとりから「小学校の時に親友だと思っていた子に好きな子のことを教えたら皆にばらされた」という発言があり、これへの参加者の反応は様々であった。子ども時代の微笑ましい「あるある話」として聞ける人と、大人になってからも尾を引く「トラウマ話」としてしか聞けない人とがあるのかもしれない。

いずれの質問もその場で思いついたもので、作品の本質に迫るような鋭さはなかったと思うが、「気軽に話しましょう」という会のコンセプトには沿っていたのでは、という気がする。

(5) 開催記録Ⅱ ～ 参加者の発言を軸に ～

会の終盤、学生の一人がほかの二人に向かって出し抜けて「兄弟姉妹はいますか？」と尋ねる場面があった。自分には妹が一人いて割と仲もいいんですが、という質問者の話に応じるように、ほかの二人も返答をくれたが、ファシリテーターが仕切ることの多かった場で突然参加者が別の参加

者に向かって問いを始めたこの瞬間が、本会の一番の成果だったように思える。「兄弟姉妹はいますか？」は何気ない質問のようであり、実は作品のとても重要な部分を突いているように思えるからである。

『こちらあみ子』を兄と妹の物語として読んでみた時、そして試みに兄の側に立ってこの物語を考えてみた時、ここに描かれているのはいわゆる「きょうだい児」問題だという人がいるだろう。あみ子という、困った子には違いないけれどこの上なく魅力的で懐かしい子を、私たちはどう受け止めたらいいのか、いちばん近いところで絶えずその問題を突きつけられていたのが、二つ年上の兄なのである。彼はこの現実から逃げることができない。やがて「不良」となるこの兄を主人公に物語をリライトしたならば、そこに登場するあみ子はどのような文体を採ってどのように描かれることになるのだろうか。

また、これは別の学生からだが、「父」があみ子にしっかり向き合っていない、ずっと逃げている感じがする、という指摘があった。この発言には、しっかり苦しんでいる「兄」に比べて、という含みを感じられ、あみ子の問題は家族全員で受け止めるべきで、そこに綻びがあれば必ず誰かにシワ寄せが行くのだ、と言っているように聞こえた。社会福祉士志望というこの学生からは、多様性という便利な言葉で処理できるほど現実には甘くない、という発言もあり、個人や家族レベルでの情緒的な対応には限界があり、専門家も入ってチームで向き合わねば話は先に進まないということを暗に言ったものと受け取った。

私こと筆者にはこの作品を、いわゆる発達障害を持った子の物語としては読みたくないという思いがあった。誰しもが少なからずあみ子の要素を持ってこの世にあるのだから、私たち自身の物語として、特殊ではなく一般を描いた作品として受け止めたいと考えていた。だが、それは筆者のロマンチズムだったのかもしれない。学生の言葉にもあるように、そこまで「現実には甘くない」ということか。

(6) 総括

2時間という限られた枠の中にあっても、ある参加者の発言によって他の参加者の発言が次々と引き出されていくような、好ましい呼応関係を目の当たりにすることができた。標題にうたった「読書会による共感力・コミュニケーション能力向上の試み」はひとまず成果をあげたものと考えてよさそうである。

読書会開催から7か月以上が経過した2025年11月初旬、参加学生の一人と改めて話をする機会に恵まれた。「兄弟姉妹はいますか？」とほかの二人に問いかけたあの学生である。読書会当日のことをどれだけ憶えているか尋ねると、参加者の人数や顔ぶれ、テーマブックのタイトル、作品のあらまし、会場の雰囲気に至るまで非常によく記憶しており、気楽に意見交換ができて嬉しかったとの感想をくれた。会への参加をきっかけに以前よりも本をよく読むようになったとも話していた。一人で本を読むのとは明らかに異なる読書経験が彼女の中に蓄積され、それがまた次なる読書経験を欲しているのだと思われる。

筆者個人にとっても、共感と発見の両方に恵まれた、非常に学ぶところの多い読書会体験となった。本稿執筆によってさらにこれが経験へと転化してくれることを期待している。

おわりに

開始から3年目を迎えた読書会「静岡英和ブックカフェ」は不定期開催なうえ参加者も都度入れ替わり、しかもごく少数である。会をイベントとして外側から捉えれば、なるほど物足りない感じは否めないかもしれない。しかし、参加者全員にテーマブックを進呈するというシステムを維持することや、皆がゆったり発言してなお時間に余裕があるという環境を大事に考えるならば、「ちょっと足りない」くらいの現状が読書会としては最も幸せな在り様なのかもしれない、とも思う。

ただ、そうは言っても、本共同研究の肝である共感力の変化に関する考察のためには一定数のサンプルが必要となるし、その蓄積から漸く諸々の分析も可能となる話であろう。「静岡英和ブックカフェ」が共感力・コミュニケーション能力向上の場として本学に根付いていくためには、今後どのような仕掛けが必要かということを考えるためにも、一層のデータの蓄積と解析とが必要となるだろう。

本稿は今後も長く続いていくであろう「静岡英和ブックカフェ」の事始めについて記録したものである。2023年度、2024年度と1回のみで開催であったが、2025年度は本稿執筆時点で既に1回目を終え、年度内にもう1回おこなう予定である。ゆっくりしたペースではあるが、安定的な開催の芽が出てきたことを喜ぶたい。

(※注)

- 1 ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（新潮文庫、2020）をテーマブックに、2024年2月27日(火)に静岡英和学院大学図書館セミナー室にて開催。学生の参加者は6名（人間社会学科1名、現代コミュニケーション学科5名）、教員の参加者は主宰の重森のほか後に本共同研究に加わる大槻、村松の3名。
- 2 竹田信弥 田中佳祐『読書会の教室』（晶文社、2021）
- 3 吉田新一郎『読書がさらに楽しくなるブッククラブ』（新評論、2013）
- 4 2014年、明治大学准教授（当時）伊藤氏貴の企画により創設された文学賞。2018年以降は文部科学省後援行事となった。その年の直木賞候補作全10編を読み込んだ高校生審査員が激しい議論の末に受賞作を決めるシステムである。年々審査員への応募者（応募校）が増え、直近の第12回（2025年）は全国47校からの参加者によるオンライン予選の後に、選抜12校の代表者による本選がおこなわれ、受賞作が決定した。本選会での議論は7時間にも及んだとのことである。本家直木賞を逃した作品が選ばれ、著者が泣いて喜んだというエピソードもある。「読書会」の一形態と言うにはあまりに規模が大きいが、高校生の読書活動のひとつとして紹介しておきたい。

- 5 齋藤孝『読書力』（岩波新書、2002）
- 6 伊藤氏貴『奇跡を起こすスローリーディング』（日本文芸社、2011）
- 7 山本多津也『読書会入門』（幻冬舎新書、2019）
- 8 向井和美『読書会という幸福』（岩波新書、2022）
- 9 三宅香帆『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』（集英社新書、2024）
- 10 今村夏子『こちらあみ子』（筑摩書房、2011）のちちくま文庫（2014）読書会では文庫版をテキストとして使用した。
- 11 『人づくりニューズレター／No.22』（静岡県文化・観光部大学課人づくり学術班、2011）所収「朗読で再発見！ “ふじのくに” 静岡の魅力」
- 12 深沢七郎『檀山節考』（新潮文庫〈改版〉、1987）この作品も出版の翌年には映画化されさらに読者を増やした。正宗白鳥が「人生永遠の書」と評したことの意味を今こそ考えたい書である。筆者は『こちらあみ子』にもそれに類するキラーフレーズを贈りたいのだが、容易な作業ではない。
- 13 『こちらあみ子』（監督・脚本 森井勇佑、製作 ハーベストフィルム、エイゾーラボ、日本映画2022）